

コーヒーブレイク



蓄音機の楽しみ

会員 島山 正誠 (33期)

今を去ることウン十年の昔、まだ学生だった私は、銀座ソニービルで蓄音機の音を聴かせるというので、出かけて行ったことがある。会場では骨董家具のような蓄音機が古めかしい音を奏でていた。そのとき、私の前に二人の老紳士が立っており、こんなことを言っていた。「これこそ本当の音ですなあ。これに比べたら、最近のステレオなんてものは、チャンチャラおかしくて聴いていられませんよ。」「まったく同感ですなあ。」私は、心中、これもたしかに悪くはないが、やはりステレオの方がいいと思ったものだ。

当時はLPレコードの時代だった。その後1982年にCDが登場し、原音の再生という点で飛躍的な発展をした。音のひずみがない。回転むらもない。最初のCDは1枚約4000円もしたが、次第に安くなり、現在は輸入盤なら数百円にすぎない。LP時代は眼を皿のようにして傷がないか検盤してからでないとは大枚をはたけなかったものだが、CDならその心配はいらない。勢い大量に買うことになる。すると不思議なことに、あまり聴かなくなるものだ。書物の「積ん読」と同じだ。

10年ほど前にふたたび蓄音機に出会った。さすが広い東京には何でもあるもので、蓄音機を扱う専門店が歌舞伎座の近くや神保町にある。それらの1軒で勧められるまま、ポータブルの蓄音機と数枚のSP盤を手に入れた。蓄音機本体は10万円と少しとだけ言っておこう。これがよかった。特に声楽やヴァイオリン

が向いているようだ。蓄音機自体がひとつの楽器となったように、電気で加工しない純粋な音が出てくる。だから、最高級の蓄音機で再生した音をマイクで収録してCD化しても、なぜか蓄音機にはかなわないようだ。

動力は原則としてゼンマイ、針で拾った振動をサウンドボックスで金属や雲母の薄板の振動に変える。その音がボディに格納されたホーンで拡大される。

私は33だが（期がね）、子供のころ家に蓄音機がなかったわけではない。しかしそれは粗製品だったに違いない。専門店から太鼓判を押された機械で聴いた音は新鮮であった。

それ以来、蓄音機は私の趣味の仲間入りをしているのだが、大きな音が出るのでいつでもどこでも鳴らせられないのがつらいところだ。ボリュームなどはなく、音量の調節は針の太さでするしかない。

蓄音機にかけるSPレコードは、ネットオークションでも入手できるし、それほど高価なものではない。ただし、ベートーヴェンの第九は8枚16面にもなる。その点、小品や歌曲集のように1面に1曲ずつ収まるものは扱いやすい。G. ヒュッシュュが歌うシューベルトの冬の旅などは戦前の学生の愛聴盤だったらしい。

今の若い法律家は我妻民法すら読まないそうだ。まして蓄音機など聴いたことがないのは当然だと思う。しかし、ちょっと試してみてもいいかだろうか。少なくとも民法講義を精読するよりずっと簡単だから。